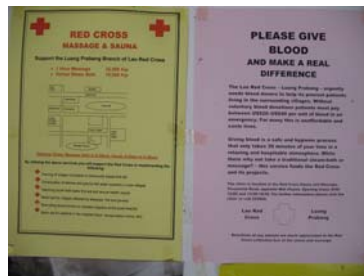


- 8 : 3 0            **Breakfast** ゲストハウスで例の朝食。  
前もって予約したボート(メコン河の遊舟)で、上流に遡り、酒造りの村、紙すきの村、織物の村を巡り、パークウー洞窟(Pak Ou)を巡る約2時間余りの船旅である。
- 14 : 0 0            昨日は休館日にて見学出来なかった王宮(ルアンプラバン国立博物館)を見学。
- 15 : 3 0            ツクツクにてルアンプラバン空港に向かう。
- 16 : 3 5            **Lao Air** 機に搭乗。**XIENGGOUANG** へ向かう。約30分の飛行時間。
- 17 : 0 5            **XIENGGOUANG** 空港に着陸。  
ホテルから出迎えの車が来ている。調子のいい若者。これが、荷物の手続きなど、やってあげると言う。後ほど判ることになるが、これが、ホテルの人間ではない。実はホテルに巣くう旅行者の人間である。**VANSANA HOTEL** 着。  
一旦、チェックインをして、18:30からホテルロビーにて先の旅行社の若者と打ち合わせ。我々の前に同じ場所で、フィンランド人婦人3人と打ち合わせをしていた。このフィンランド人は我々と同じ航空便でルアンプラバンから到着したものである。この旅行社は90ドルから100ドルのツアーを提案してきた。行程はモン Village, Jar 平原 Site 1、Site 2、昼食、Site 3、被弾し打ち捨てられたソ連製戦車を廻る。2日目は蒙の Village, Tam Piu 洞窟(Tham Piu), 昼食、Hot spring を廻ると言う。これらのポイントは、市街地からも離れており、ツクツクの乗り入れが禁止されている。  
旅行社やホテルなどで車をチャーターするしか方法は無い。  
相場からみて、あまりにも高額過ぎる、難色を示し、折衝を続けると、同行者のラオス語で態度一変、先ほどのフィンランド人グループは20ドルで同じコースを廻る、これに同乗するなら20ドルでOKとのこと。  
再検討の要あり。確答は避けて、この提案に乗るなら、後刻、電話することにして電話番号を控え、ともかく街へ出て、旅行社を探ることとする。  
ホテルに車を用意させ、街へ出る。同乗したのは、フランス料理を食しに行く先ほどのフィンランド人3人、帰宅するくだんの旅行者の人間、我々2人、計5人である。市街地のかかりで我々2人、旅行社の人間が先に、降車。降車地点近くに旅行社あり。**Indochina Travel** 社である。15ドルで同じコースを行くとのこと。明日はこのツアーに乗ることにし、2日目はさきの20ドルのコースを採ることとして、電話連絡。OK。  
街を巡り、レストランで食事。ホテルへ帰着。ホテルの門限は午後9時。  
ホテルのシャワーが冷水。冷水にてシャンプー。電気温水器のスイッチの入れ忘れ。  
これで、ひと悶着。



ゲストハウスの張り紙。観光案内。外国への電話の架け方が説明してある。  
赤十字社がマッサージとサウナを経営しているらしい。献血を呼び掛けるポスター。この赤十字のポスターとドゥネイシオン Box はホテル、空港などあらゆるところで見られた。  
メコンの朝。今日の暑さも厳しそう。

【メコンを舟で遡る】



↑ 遊船が終結する船着場。昨日のワットシェントーンを降りたところ

←メコンの川風が心地よい→



最初のメコン河畔のモンの Village。紙すき、織物の村。直売所も。  
Ten Minutes の大声。10分で舟に戻れとのこと。





悠然たるメコンの流れ。少し濁って見えるのは、泥の色彩が溶けていると思われる。濁っているかと言うとそうではない。ましてや有機物の汚染ではない。雨季には水量が増し、水辺の樹木の根が水に隠れる。かなりの水位差。



【酒つくりの村に上陸】

またしても Fifteen Minutes の声。15分で舟に帰れとのこと。



米焼酎である。これをラオ・ラオーと称する。なかなかの独特の風味である。このラオ・ラオーを観光客向けのレストランで注文しても、置いていない。これとは別に、ビアラオを作る企業がラオ・ラオーと称して米焼酎を販売しているが、これはこの風味の無い、日本のかつての時代の安焼酎である。庶民が好んで口にするようだ。蒸留の方法がベニヤ板に手書きしてある。ドラム缶のようなもので、酒を加熱し、その蒸気をドラム缶に窪みのあるフタを乗せた上から水で冷却して、蓋のうしろ側に凝結してくる液体を集める方法である。単純明快な方法。この方式は他の村でも同じである。風味はそれぞれに異なる。3本をお土産に買う。



人の良さそうなおばさんが酒を売る。瓶はジュースの空きビンとのこと。(サチの話)。栓は木、ビニールが巻いてある。瓶には竹を細く薄く加工したもので美しく装飾されている。この装飾はなかなかの参考になる。村のたたずまい。織物や雑貨を売るショップも。村にはワットも広場もある、大きな村と見える。



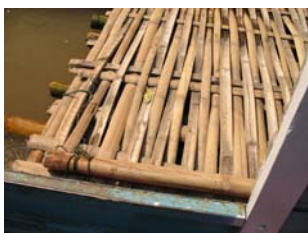
←船着場と村との間は木製の通路を歩く



船着場で再び舟に帰る→

【パークウー(Pak Ou)洞窟】に到着

ルアンプラバンからメコンを遡ること約25キロ、メコンがナムウー川と合流する地点にこの洞窟はある。洞窟は2か所ある。日本の「五百羅漢」のような雰囲気です。4000体以上の仏像が置かれている。



←船着場の栈橋。竹の筏。よく工夫されている。急な階段を上ると洞窟。



←ナムウー川との合流地点。水の色が異なる。

船着場は遊船でヒシメキ状態。→





【王宮（ルアンプラバン国立博物館）】



国立博物館は館内写真厳禁。靴を脱ぎ、脱帽して手荷物のすべてを預けて、入館が許される。ガイドブックによると、かつて王宮だった建物を利用して王朝時代の歴史を展示した博物館。王族が使用した家具や調度品、各国使節からの贈答品などが展示されており、当時の繁栄をしのぶことができる。

建物は1909年、王シーサワンオンとその家族の住居として建設された。当時はフランスがラオス全土を植民地支配していたが、ルアンブラバンだけは「保護領」として形式上の王政を続けさせた。ラオスの王を保護しているとの印象づけるためにこの王宮を設計したと言われている。

1959年シーサワンオンの逝去後もその家族が居住していたが、彼らをも巻き込んだ内戦に突入する。1975年現政権（パト・ラオ）がルアンブラバンを掌握すると、家族は北部に送られ、博物館として開放されることとなった。1967年に旧ソ連の画家が描いた家族の肖像画（優れたものではない）が展示されていることや、日本ゆかりの品が展示されている、ことなど興味深い。

皇太子が1965年に訪日し現天皇と会見している。これらの時代背景の中での王族の状況を想像するだけでロマンである。



แผนเที่ยวบินประจำวัน 21 FEB 07			
FROM LUANGPRABANG TO	FLT. NR.	CHK-IN	DEP.
BANGKOK	Q-633	09:30	11:30
VENTIANE	Q-102	10:30	12:30
BANGKOK	Q-942	10:30	12:30
HANOI	Q-313	11:40	13:40
BANGKOK	Q-943	13:20	15:20
VENTIANE	Q-110	14:35	16:35
VENTIANE	Q-112	14:50	16:50
VENTIANE	Q-116	16:10	18:10
VENTIANE	Q-104	17:10	19:10



ルアンブラバン空港の様子。他では見ることの無かったファーストフード店、Smile Burger とある。壁にはルアンブラバンの観光地図。世界遺産都市ルアンブラバンへようこそとある。白板に手書きの発着表。



国花を尾翼にあしらったラオ・エアに乗り込む。MA60のメーカーがどこなのか、未だにわからない。  
ルアンプラバンからピエンチャンまで飛ぶ便、途中でシェンクアンに立ち寄る便。



ルアンプラバンを離れて

シェンクアン上空に入る。赤い直線道路がやたら、目に入る。  
明日からこの道路を歩いてツアー。



シェンクアン空港に着陸。居並ぶ空港職員を見ると、何やら、ピョンヤン空港に降り立った雰囲気。



宿に着くと既に落日。